

すみれ思考

いにしえから愛されてきた花

加藤 良一 2023年4月29日

マンセル値(2.4P 4.3/10.3)

「すみれ」は我が国では古くから親しまれてきたとてもポピュラーな花です。また、「すみれ」は色の名前としても使われています。すみれ色がいつごろから色名として使われるようになったか定かではなく、平安時代には、装束の重かさねの色目として「堇菜すみれ」と「壺堇つぼすみれ」というのがあったといえます。堇菜は表が紫で裏が薄紫つぼすみれ、壺堇は表が紫、裏が薄めの緑となるような生地の配色です。すみれ色ということが現われたのは近代になってからであり、英語の "violet" の訳語として使われるようになったといえます。

余談ですが、どのような色かを正確に伝えるために、色相・明度・彩度を記号と数値で表すマンセル値というものがあります。これを使うことで、望む色がより正しく再現されるわけです。

マンセル値で、すみれ色は〔2.4P 4.3/10.3〕です。また、すみれの一種パンジー “pansy” は、パンジーのうちの紫の花弁の色を指しますが、ふつうのすみれ色よりもさらに暗い色とされていて、こちらは〔2.2P 2.4/12.5〕とされています。



この拙文のタイトルにあしらったすみれ色は、一応前述のマンセル値の色ですが、パソコンモニターのちがいによっては厳密に再現できないはずですが。電気屋に並ぶテレビの画面が微妙に違っているのと同じことでしょう。さらにこのPDFをプリントアウトすれば、プリンターの特性で同じようには印刷できません。

牧野富太郎も誇る日本のすみれの多さ

すみれの花言葉は、その色合いによってさまざまあるようですが、「謙虚、誠実、小さな幸せ」が代表的なものでしょうか。ひと口にすみれといっても、たくさんの種類があることはよく知られています。

植物学者牧野富太郎博士によれば世界中で日本がもっともすみれの種類が多いといえます。

『牧野新日本植物図鑑』に記載されているすみれ科には、いちげきすみれ“*Viola orientalis* W.Becker”から、さんしきすみれ“*Viola*×*Wittrockiana Hort.*”まで44種あります。

牧野富太郎は著書『植物記』(2008)の、「[スミレ名]談義」の項でつぎのように述べています。

スミレという名を聞けば何んということなしにそれが佳い名^よで慕わしく感ずるのであるから、これはそのスミレなる名の起りに対し盲目であるのが寧ろ賢い^{むし}ではあるまいかと思われる。何んとならば実は一たびその語原を識れば、どうも彼れの美名^{きずつ}が傷けられるような気がしてならないからである。

スミレはかの大工の使う墨斗の形ちから得た名で、それはスミレの花の姿がその墨斗に似ているからだというのである。すなわちそのスミレのイが自然に略せられてそれがスミレと成たのだと言う訳だ。

昔から我日本人は董の字をスミレに使っている。また董菜も同様である。がしかしその董も董菜も共に決してスミレその者ではないから、これをスミレとして用うるのは大いなる誤である。そしてこの董も董菜も両方共に少しもスミレとは縁の無い字である。しかしこれを董^{かさ}董菜と董の字を二つ層ねて用いた時にはここに始めてそれがスミレとなる。しかしその董^{いず}董菜が我がスミレの何れに中るかは今遽かに分り兼るが兎に角^{かく}スミレのある一種の名でそれは支那でそういうのである。この様に董の字を二つ層ねてそれへ菜の字を加え、そこで始めてスミレの名となるが、それを董の一字を用うるかあるいは董菜の二字を用いただけでは決してスミレとはならないという事を吾等は確かと知っていなければならない。

しかればすなわち植物の名として董ならびに董菜は元来何を指しているかと言え、これはかのセロリすなわちCelery(学名では *Apium graveolens* L.)をいうのである。董^そはすなわち芹と通じ董菜とも書き繖形科植物の一種の名で、これは支那で蔬として圃に作っている。すなわちいわゆる早芹で今これを解り易く書いて見れば、

董(芹)	セロリ(オランダミツバ)
董菜(芹菜)	セロリ(オランダミツバ)
董董菜	スミレの一種

である。

上のセロリのオランダミツバはまた一にキヨマサニンジンと称する名のあるのは珍である。これは昔加藤清正が朝鮮征伐の時同国からその種子^{もた}を齎らしたもので、それがその後安芸の国広島^{もはやどつ}の城地に野生の姿で生えていたそうだが、多分今日では最早疾くに絶えていてそれが一場の昔語りになっているのであろう。なぜ清正がワザワザこんなものを朝鮮から持って来たかという、彼の朝鮮征伐の砌これは名産の薬用人参^{そろ}で候と朝鮮人に騙されそれを真に受けてこれこそ貴い朝鮮人参だと信じて携え帰ったものらしい。セロリにもこうした奇談があるのは面白いではないか。

また紫花地丁という名があつて支那でこれをスミレの一種に使っている事もあれば、またマメ科植物の一種でイヌゲンゲ(学名でいえば *Gueldenstaedtia multiflora* Bunge.) という者に使っている事もある。この草は日本には産せず独支那のみに在る宿根草で一に米布袋とも称える。

スミレ類の名としては支那産の者には上の堇堇菜の外に種類によつてなお、匙頭菜、犁頭草、箭頭草、宝剣草、如意草などの名がある。

スミレにはまた我邦諸州によりいろいろの方言があつて、スモトリグサ、スモトリバナ、カギトリバナ、カギヒキバナ、アゴカキバナ、カギバナ、トノウマ、トノウマ、コマヒキグサ、キョウノウマ、キキョウグサなどの名がある。また一夜グサと一葉グサとは古歌に用いられた名であつて、その歌は「一夜ぐさ夢さましつゝ古への花とおもへば今も摘むらん」、ならびに「いのちをやかけて惜まん一葉ぐさ月にや花の咲かむ夜な／＼」である。

我日本はスミレの種類が多いこと実に世界一で、つまりスミレでは日本は世界の一等国である。日本はスゲ類でもそうである。なんと盛んなもんではないか。世界万国に対し^{そねめそねめ}妬々と言いたいところだ。我邦のスミレ類は^{スペース}一百の種をズット突破している。すなわち全世界スミレ類のほとんど五割に近い数を占めているのはエライもんだ。これらは皆 Viola というスミレ属に属するものでこの Viola は俗に言えば Violet である。Viola は^も原とスミレのギリシャ語 *ion* に基づきそれに小さい意味を持たせたラテン語字体である。そしてこれらのスミレ属などが相集つていわゆるスミレ科すなわち *Violaceae* を構成している。

すみれの語源は大工道具の^{すみれ}墨斗の形に由来すると述べていますが、これが今でも形はやや近代的に変わつてはいるものの使われているようです。



同じく[「スミレ名」談義]で、万葉集の山部赤人の歌を引用してスミレへの愛を述べています。

「春の野にすみれ摘みにと来し吾れぞ野をなつかしみ一と夜寝にける」と詠んだその人が、実際スミレがそこにあつたのでそれでその野が殊更なつかしかったのであつたとしたら、チョット他人の及ばないほどのスミレの愛人であるといえる。かくも強くスミレに愛着を感じる人は世間に余り見受けぬであろうが、これは山部赤人でその

歌は『万葉集』に出ていて有名なものである。

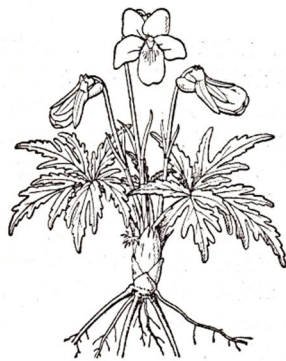
スマレへもこの位の愛を持たねばスマレを楽しむ人も余り大きな顔をするわけには行かない。

しかしスマレといえればほとんど誰れでもその名を知らぬものはない位だ。そして何んともなく懐かしい感じがする花である事は辞み難い。

それはなぜであるかと言うと、スマレなる小さい草がしおらしい美しい花を麗らかな春の野に^{ひら}発いて軟かな春風にゆらいているからである。アノ濃い紫の色を漂わしかつその花の姿も何んともなく優しいので、どんな人でもスマレを可愛らしいものとして礼讃しない者は無いであろう。

赤人の「春の野にすみれ摘みにと来し吾れぞ野をなつかしみ一と夜寝にける」は、「春の野に、すみれを摘もうと来た私だが、美しい野辺の様子に心をひかれたので、一晚を野で過ごしてしまったことだ。」という心境を歌ったもので、これはまったく牧野富太郎の植物愛にも通ずるものです。牧野富太郎の生涯を綴るNHK朝ドラ『らんまん』で、毎回最後にいろいろな花を紹介しています。

2023年4月27日の放送では「ひごすみれ」が出てきました。早速、『牧野新日本植物図鑑』に当たってみたところ、「ひごすみれ」として独立した項目はなく、「えいざんすみれ(えぞすみれ)」の解説の中で、「えいざんすみれに似て花はやや小形で白色……。」と書かれていました。



1639. えいざんすみれ (えぞすみれ)

〔すみれ科〕

Viola eizanensis Makino

本州、四国、九州の山地の樹陰にはえる無茎性の多年生草本で、花時の高さは7cmぐらいである。根茎は短かく太く、根は白色である。葉は根生し、花期には葉身とほぼ同じ長さ3~4cmの葉柄があり、葉身は3裂し、その両外側が深く2裂するので5裂のように見える。各裂片はさらに分裂し、その分裂片は鋭浅裂である。花後に出る葉は長大で長さ15~25cmほどにもなり、葉身は葉柄の3分の1長、単純に3裂しその裂片はふつう広く長卵形であって、これは本種の特徴である。葉柄のつけ根には白色で膜質、皮針形の托葉片がある。春に葉の間から葉と同高またはそれよりも低い花柄を出し、その先に淡紫白色または淡紅色のやや大きい花を横向きに開き、しばしば香がする。ふつう唇弁と側弁には目立って紫のすじが入り側弁の内側には突起毛があり、唇弁の距は長さ5~6mmほどで先がややふくらむ円柱形である。花柱の先は倒三角状にふくらむ。ヒゴすみれ(*V. albida* Palib. var. *chaerophylloides* F. Maekawa) は本種に似て花はやや小形で白色、葉身はほとんど全裂し、各々の裂片は細く、花後の長大な葉になっても5裂のままである。またエイザンスミレと異って日当りのよい山地を好む。〔漢名〕胡蘆草は誤りである。〔日本名〕比叡山にはえるスマレの意。エゾすみレというが蝦夷(北海道)には分布しない。おそらくエイザンスミレが訛ったものではないかと考える。

1640. さんしきすみれ

〔すみれ科〕

Viola × *Wittrockiana* Hort.

もともと欧州原産のものからイギリスとオランダで園芸化されたもので、わが国には文久年間(1860年頃)に渡来し、今では色々の改良品が栽培されている。ふつうはパンジー(Pansy)という。二年生または一年生の有茎性草本で高さは15~25cmぐらいになる。茎は直立して枝が分かれ、緑色で質はやや柔らかく、稜がある。葉は互生し、長い柄があり、葉身は卵状長楕円形または皮針形で、へりには鈍いきょ歯がある。托葉は大形で葉柄より長く、緑色で羽状に深く裂ける。春から夏にかけて葉腋ごとに花柄を出し、その先に左右相称の大形花を横向きに咲かせる。品種によって大きさや花色は非常に変化があるが、ふつう紫、白、黄の三色を基にしている。緑色がく片は5個で附属体は大きい。花弁は平らにひらき、円形で、側弁と唇弁の内側には毛があり、唇弁の距は短い。花柱の先端は丸くふくらみ、柱頭のまわりを囲んで突起毛が密生している。サンシキすみレはヨーロッパに分布している *V. tricolor* L. と他の近縁種との交雑によって生まれたものである。〔日本名〕三色すみレの意味で紫と黄と白の三色がまじるからである。古く欧州でもてはやされたが、一時流行からはずれた。しかし近年新しい交配で美しい花色が作り出されまた盛んになった。





[参考資料]

牧野新日本植物図鑑 (2022年3月3日)

http://rkato.sakura.ne.jp/mushimegane/se20220303_makino_shinnihon_syokubutsuzukan.pdf

2023年5月7日 revised

Back

虫めがねTopへ

Home

Home Pageへ